

キスタン地方や中国東部と西南部からも採集品が報告されている。中国東部から Maximowicz (1883) と Limpricht (1922) が報告した本種の大部分は *R. dumulosa* であることが R. Hamet (1929) によって明らかにされている。中国西南部の記録のもとになった標本の多くを調べたがいずれも *R. algida* と異っており、*R. alsia* など雌雄異株の種類であった。それゆえ確実な標本が新たに得られるまで中国西南部のフロラから本種を除いておくのがよいと考える。本種は *R. dumulosa* (Franch.) Fu に近縁であるが、花の形、花卉の形と大きさ、花柱の長さ、萼筒の長さが主に異なる。

□ Dassanayake, M.D. & F.R. Fosberg (ed.): **A Revised Handbook to the Flora of Ceylon** Vol. I. 508 pp. Feb. 1980. Smithsonian Institution, Washington.

セイロンの植物誌は Henry Trimen が 1893 年から 1900 年にかけて *The Handbook to the Flora of Ceylon* にまとめ、100 枚の美しい色彩図と共に 5 冊の本を出版している。また A. H. G. Alston が 1931 年に補遺を 1 冊追加した。セイロンは交通の要路にあたり、*zeylanica* とか *ceylandica* と名づけられた植物が多いことから示されるように、古くから多くの植物が採集され研究されていたため、種類の基準となる植物が多い。したがって、Trimen の著書はセイロンの植物のみならず、アジア熱帯の植物研究に欠かせない重要な文献である。しかし出版されてから 80 年たち、古典としての価値に変わりはないが、学名など現在の水準からはかなり古くなり、不適当なものが多くなっている。

1968 年から Smithsonian Institution の Fosberg 博士を中心として、新しい資料のもとに再検討の計画が立てられ、各科が多くの分担者によって研究がつづけられている。本書はその一部が第 1 巻として出版されたものである。

研究のまとまった科からのせられたと見られ、一定の順序はなく、Amaranthaceae, Bombacaceae, Guttiferae, Compositae, Connaraceae, Dipterocarpaceae, Elatinaceae, Fabaceae (part), Mimosaceae がのせられている。キク科が大きく、全体の三分の一を占めている。キク科やヒユ科などは熱帯に広く分布する種類が多く、日本南部の植物にも関係するものがある。

本書の一つの特色は、使用している学名の基準標本をたんねんに挙げていること、研究に使った標本の主なものを記録していることである。標本の引用は読者にとってはわずらわしいように思われ、頁数を制限するさい削られることが多いが、再検討のさいの基礎となるので、長期的な視点からは重要なものである。これらの点が考慮されているので、本書が完成すればアジア熱帯の植物研究には欠かせない文献となるであろう。

(山崎 敬)